

李光洙における上海時代の意味

The Meaning of the Shanghai Age in Lee Gwangsu

李 侑珍

LEE Yujin

李光洙における上海時代の意味

The Meaning of the Shanghai Age in Lee Gwangsu

李 侑珍

LEE Yujin

요지 : 본 논문은 상해 시절의 이광수에 대해서 살펴 보았다. 『독립신문』의 주필로서 쓴 논설과 상해에서 허영숙에게 보낸 편지들을 자료로 공적인 입장과 사적인 입장의 이광수에 대해서 살펴 보았다. 갑작스러운 상해에서의 망명 생활 속에서 이광수는 『독립신문』의 주필로서 신문이라는 미디어를 통하여 해외에 조선의 독립을 알리고 조선민족의 「단결」과 「통일」을 부르짖으며, 「국민」으로의 개조를 위해 많은 논설들을 썼다. 그러나 과중한 임무로 인한 육체적 고통과 고독으로 인한 정신적 외로움, 무엇보다도 조선 민족에 대한 실망으로 인해, 상해에서의 생활은 길지 못했다.

『독립신문』의 논설들과는 다른 개인적인 감정과 고통은 편지 속에 고스란히 담겨져 있으며, 이 자료들을 통하여 이광수의 상해에서의 경험과 독립운동에 대한 사상 및 활동의 변화를 엿볼 수 있었다.

キーワード : 上海、『独立新聞』、許英肅、書簡

1.はじめに

李光洙は、1919年上海へ行く前まで、二度の日本留学（1905～1910年、1915～1919年）、五山学校教師としての勤務、約1年間にわたる上海やロシアでの放浪生活など、様々な経験をした。この経験を通じて学んだ知識や見聞をもとに書いた論説や小説によって、李光洙は作家だけではなく、啓蒙主義者・教育者としても評価されることとなった。

第2次日本留学時代の1918年、李光洙は恋愛中だった許英肅と2人で北京へ逃避し¹、逃避中の北京で第一次世界大戦の終結を知ると、北京での生活を整理し、ソウルに向かい国内の情勢に

ついて相談した後、日本に渡った。彼が突然北京での生活を整理して日本に向かったのは、今こそ独立できる絶好の機会だという判断もあり、志士としての使命があったためであろう。

李光洙は日本で「2・8独立宣言書」を執筆した後、朝鮮の独立宣言を海外メディアに知らせる任務のため上海に行くことになった。李光洙はその経緯について次のように述懐している。

すべての準備を終えて2月8日がくることだけを待っていたある日、崔八鏞が私の下宿に来て、私に上海に行くよう勧めた。これは自分の個人の意思ではなく、同志一同の意思であるということをつけ加えながら、お金（2百何十ウォンだったのか確かではない）をくれた²

このように李光洙の上海の亡命生活は不本意に始まった。日本に行くことを決めた瞬間から平坦な道が待っていないことは分かっているが、亡命生活の身の上になるとは思わず、日本から逃げないといけないうる緊迫な状況で決められたということは述懐からも窺うことができる。

では、このように北京から突然朝鮮に帰国し、「2・8独立宣言書」まで執筆するなど、朝鮮の独立のために積極的に活躍した李光洙は、上海で何をし、何ができたのだろうか。そして、上海で経験したこと、悟ったことは李光洙という立場においてどのような影響を及ぼし、李光洙の独立運動に対する思想と活動にどのような変化をさせたのだろうか。李光洙が上海から朝鮮に突然の帰国を決心したことも上海での経験と無関係ではないだろう。

この意味から、李光洙の上海時代を辿ってみることは李光洙の初期の活動全般を理解するとともに、上海から帰国したことも含めて李光洙の独立運動に対する行跡と思想を理解するにあたって重要な意味を持つ作業であるといえる。

2. 研究資料と方法

上海について李光洙は、独立宣言を海外メディアに知らせる任務の他にも大韓民国臨時政府の発足のための任務を果たし、大韓民国臨時政府が発足された際にはすぐ辞退したが、外務委員としても任命され、臨時史料編纂会の主任と独立新聞社の社長兼主筆としての任務も担うことになった。独立宣言を海外メディアに知らせるため突然上海に行くことになった経緯から考えると、上海で任された任務は使命感と責任感を感じるほど重大な任務であったといえる。

李光洙が『独立新聞』の社長と主筆を担うことになったのは、彼が米国の『新韓民報』の主筆

の職を勧められていたことや、米国に行く前に朝鮮語雑誌『大韓人正教報』³の主筆を務め、上海に亡命した直後は「新韓青年党」の党員と交流し、彼らの勧誘で『独立新報』の刊行を手伝った⁴経歴があったからであろう。李光洙は『独立新聞』の社長兼主筆・編集者として、1919年8月21日の創刊号から1921年4月2日まで多くの社説や論説を書いたが⁵、彼は以前から啓蒙主義者・教育者・志士として多くの論説を書いたため、その経験と思想が『独立新聞』の論説にも大きな影響を及ぼしたと思われる。

一方、私的なこととして、当時李光洙は許英肅と恋愛中で、許英肅の母が結婚に反対したため北京へ2人で逃避し、その逃避中に李光洙は第一次世界大戦の終結を知り、許英肅を北京に残したまま自分一人だけ朝鮮へ帰国した。その後、上海へ行くことになったため、許英肅とは突然離れることになり、一生の重大事であった許英肅との愛情問題を抱えたまま上海で亡命生活を始めることとなった。その際に李光洙が唯一できることは、許英肅に手紙を送ることで、その手紙は李光洙と許英肅の心境と状況が窺うことができる重要な資料である。

李光洙と許英肅は恋愛中はもちろん、結婚後も多くの手紙のやり取りをした。その手紙を集めて許英肅は『春園愛情書翰実録集-愛する英肅へ』（文宣社、1955年）という書翰集を刊行し、『李光洙全集』18（三中堂、1963年）にも「愛する英肅へ」と題して再収録された⁶。書翰集は時期別に分けられ、「上海にて」という題で上海時代に書いた手紙だけを集めて載せているが、手紙は私的な立場で書いた資料であるといえる。

以上の経緯から、突然の北京から朝鮮へ、またすぐ日本に渡って、日本から上海へと窮迫した展開による李光洙の上海での生活は、大韓民国臨時政府の発足のための任務、臨時史料編纂会の主任としての任務、『独立新聞』の主筆としての任務だけではなく、許英肅との私的な愛情関係の問題も関わっており、李光洙にとっては過重な任務と重要な問題を掲げていた大変な時期であったといえる。

そのため本稿は、李光洙が上海時代に書いたものとして、新聞というメディア、さらに上海臨時政府の機関紙としての役割を担わされていた『独立新聞』に主筆という公的な立場として書いた論説と、私的な立場で書いた李光洙と許英肅の書翰を資料として用いて上海時代の李光洙の行跡について辿ってみることにする。

主な資料は、李光洙が1919年8月21日の創刊号から朝鮮に帰国する前の1921年4月2日に天才という筆名で発表した論説「国民皆業」⁷までを中心とするが、大部分の論説は無署名であるため、李光洙が書いたと断定できない。そのため、出版はできなかったが『独立新聞』の主筆として書いた李光洙の論説を集めた論説集『独立新聞論説集』に収録される予定だった論説を主な

資料の対象とする⁸。そして、李光洙の名前や筆名が書かれてないものに関しては『独立新聞』の論調としてみることにする。

『独立新聞』の主筆として公的な立場で書いた論説と、許英肅との愛情の問題を含めた私的な立場で書いた書翰は、李光洙の上海での亡命生活における状況を窺うために重要な資料といえ、実際にはこれらが互いに絡み合って李光洙を悩ませ、苦しませていたと思われる。そのため、この2つの資料を照らし合わせ読む作業は上海時代の李光洙を理解する際に重要な意味をもち、両方の資料を通じて李光洙の上海での行跡と心境を読み取ることが試みる。

3. 上海時代の李光洙の任務

3.1. 『上海』における李光洙の任務

上海で亡命生活を始めた李光洙に任された任務は重大な任務であった。まず、李光洙を上海に行かせた理由であった3.1 独立運動に関する内容を海外メディアに知らせる任務があった。李光洙は「3.1 独立宣言書」を英語に訳し、新聞記事も作成して上海発行英字新聞、中国新聞、聯合通信（AP）に提供した。そして、英文「3.1 独立宣言書」をアメリカ・イギリス・フランスの元首の宛てに送った⁹。その際の感激を李光洙は「この日呂運弘と私は本当に肩をそびやかしてノルウェー人が経営している無線電信局へ行行った。アメリカ、ハワイの国民会へ送る電報とともに7百何十ウオンの電報料金を払って電信局から出た時は本当に違う世界のようにであった」¹⁰と述懐している。3.1 独立運動の記事は3月4日の朝刊聯合通信（AP）に報道され¹¹、上海に来る時に任命された海外メディアに知らせる任務を充実に果たし、短い時間ではあったが、李光洙が上海に来た甲斐や感動を最も感じた時期ではなかったのかと思われる。

上海では独立を海外に宣伝するために、海外メディアに知らせることだけでなく、パリ講和会議にも独立の要望を宣伝しようとした。そのために「韓国独立に関する要望書」を作成し、個人よりは団体の主催で提出することが認められるということで急務「新韓青年党」を創設したが、李光洙はその黨員となって代弁者としても活動した。

上海でのこのような動きは、国内外の民族運動の団体の代表者を上海に集結させ、臨時政府を樹立しようとする協議まで進み、臨時政府の樹立の準備が始まった。その前提として李光洙は3月下旬に玄楯、孫貞道と協議して「独立臨時事務所」を開設し、4月10日から11日にかけて李光洙と孫貞道の提議によって各地方で地方代表会が開催された。そして、臨時議政院を組織し、李

光洙は書記という任務を担うと同時に、臨時議政院法の起草委員にも選定され、院法を起草した。

このように李光洙が臨時政府を組織するための準備過程や樹立において重要な役割を果たした結果、ようやく1919年4月10日に大韓民国臨時政府が発足された。その際に李光洙は臨時政府の各委員の中外務委員という委員に任命されたが、すぐ委員職を辞退した。辞退した理由としては、李光洙が上海に来る際に担わされた任務は、政治ではなく、海外に朝鮮の実情と独立の要望を海外メディアを通じて知らせる任務を果たして、言論を担当することであったためであると思われる。その際に、『大韓人正教報』の主筆を務め、『独立新報』の刊行を手伝った経歴、指導者として、教育者として論説を書いた経験、英語の実力などを含めた能力と資質も大きな影響を及ぼしただろう。

さらに、独立宣伝のもう一つの活動として、臨時政府は国際連盟に過去から現在までの朝鮮と日本の歴史をまとめて現在の韓日関係の不当性を知らせようとした。そのため、上海臨時政府の発足と同時に国際連盟に提出するための韓日関係史料を編纂するための「臨時史料編纂会」が発足され、李光洙は臨時史料編纂会の主任も引き受けることとなり、『韓日関係史料集』を編纂することとなった。

『韓日関係史料集』は国務総代理の安昌浩が陣頭で指揮したが、3人が収集した資料を李光洙が整理・執筆する方法で編纂された。『独立新聞』にも史料集編纂に関して「すでに1ヶ月をかけてたくさんの人々が苦心して編纂した「史料」は近日にはほぼ完了され新刊の問題で活版印刷ができず、10数名の筆家を招聘して複写をするが、今月末に終結する」¹²と発表され、「安昌浩を総裁とし、李光洙を主任とした臨時史料編纂会は8名の委員、23名の助役の連日の活動で本年7月2日に初め、9月23日に「韓日関係史料集」の編纂及び印刷を終了する。該資料集は国際連盟に提出する案件に対する参考の目的で編纂されたことで、これを4巻に分けて総100帙を完成した」¹³と公表された。

以上、李光洙は上海で海外メディアに朝鮮の独立運動の実情と要望を知らせる任務をはじめ、臨時政府の発足のための役割を果たしながら独立新聞社の社長兼主筆として言論を担当し、臨時史料編纂会の主任として『韓日関係史料集』を編纂するなど、多忙な任務を果たした。

では、李光洙のこのような上海での任務の経験は、李光洙という立場においてどのような影響を及ぼし、李光洙の独立運動に対する思想と活動にどのような変化をさせたのだろうか。

李光洙が書いたと推定される『独立新聞』の「創刊辞」には、「このような五大使命を背負って本報が創刊された。能力があつてこのようになったのではなく、やむを得ずこのようになった。すでに責任を持って出たため、真心と力を尽くして奮闘をしようと、果たして匹馬単騎で万里征

途に登った感じがある」と書かれている。この「創刊辞」からは、李光洙は自分が『独立新聞』の社長と主筆を担うことになったことに対してやむを得ない状況に置かれ、過重な任務を任されていたという心境と状況が読み取れる。それは、海外メディアに宣伝するほどの任務ではなく、『独立新聞』の社長兼主筆になったことからの重要性による責任感と使命感からであると思われる。

李光洙が許英肅に送った手紙からも李光洙が上海でどのような日々を過ごしているのかが窺える。李光洙が許英肅に上海から送った最初の手紙（1919年2月12日）では、「最近では英語だけを読んだり、話したり、書いたりしています。相当進歩しているような気がします。英語で百頁ほどの著述をしています」¹⁴と、上海での英語による任務として読むことだけではなく、執筆までしていることが分かり、海外メディアに朝鮮の実情を知らせる任務を果たすために毎日英語を用いた作業をしていたことが分かる。

李光洙は許英肅を北京に残したまま上海に来たことについても手紙に書いたが、許英肅に理解してもらうために送った手紙には「私を怨むでしょう。仕方がない奴だと考えたに違いありません。しかし、もうすぐ私の事情が（やむを得ない）分かれば許してくれると信じます」（1919年2月12日）¹⁵と述べている。李光洙は許英肅を北京に残したまま自分だけ上海に来たことについて罪の意識と責任感による苦しみを持っていたが、その一方、独立運動のためということが分かれば理解してくれると期待していることが窺える。これは李光洙が繰り返して主張していた「個人の愛」より「国の独立問題」を優先に考えていたこと、上海で担っている任務に対して李光洙は過重ではあるが、使命感による自負心と甲斐を感じていたからではないかと思われる。

『独立新聞』の「創刊辞」に「文明人の生活に言論機関の必要は再度いうまでもないが、挙国一致で光復の大事業を経営するこの際に臨んでもっと緊要さを悟らせる」と書かれていることから、李光洙が『独立新聞』の社長兼主筆という任務に対してどのように考えていたのかが窺える。

さらに、「創刊辞」には、「民族思想の鼓吹と民心の統一」、「我らの事情と思想を我らの口で伝えること」、「世論を喚起させること」、「新思想を紹介すること」、「改造或いは復活した新国民を作ること」と、5つの使命が書かれている。

「我らの事情と思想を我らの口で伝えること」と「世論を喚起させること」の使命は、『独立新聞』の社長兼主筆という任務がどれほど重要であるかを想起させる使命として、李光洙が多くの論説を『大韓興学报』や、『少年』『学之光』『大韓人正教報』『青春』『毎日申報』『開闢』などに載せた経歴から学んだ言論機関の重要性から悟ったこと、上記にも言及した「文明人の生活

に言論機関の必要は再度いうまでもないが、挙国一致で光復の大事業を経営するこの際に臨んでもっと緊要さを悟らせる」という趣旨から掲げた使命であるといえる。李光洙が上海に行くことを決めた理由、「新韓青年党」の代弁者として活動したこと、臨時史料編纂会の主任として『韓日関係史料集』を編纂したこともこの使命の一環からできたことであろう。

また、『独立新聞』の「民族思想の鼓吹と民心の統一」という使命は、臨時政府の発足に積極的に参加した経験から、臨時政府の樹立と同時に維持するために必要なことを民族全体に喚起させるために掲げた使命であるといえる。

『独立新聞』では、上海臨時政府を中心に「団結」と「統一」した独立運動のために「国民」にその責任と義務を負わせ、古代の優れた文化や民族性を用いて新しい「国民」に改造させようとするのが、繰り返して述べられていた。

李光洙は「2・8独立宣言書」においても「4300年の長久な歴史をもつ我が民族は実に世界最古の文明民族の一つである」と「文明民族」であることを強調しており、臨時史料編纂会の主任として書いた『朝日関係史料集』においても「朝鮮民族は優秀な文化民族であるため決して日本民族と同化できない」と述べていた。

『独立新聞』の「創刊辞」においても「我が国民は過去に榮譽の歴史を持ち、これを通じて伝えられる高潔で、勇壯な国民性をもっていた」と、優秀な「国民性」について述べており、「皆兵」においても「元来我が国民は皆兵であった」¹⁶と述べている。「古朝鮮・三韓・三国時代にもうすでに国民皆兵主義の徴兵制度が採用された」¹⁷という論拠は、祖先への誇りによるものであり、国民に祖先に対する誇りを持たせるために用いた論拠であったといえる。

李光洙は朝鮮民族を「文化民族」や「国民」と称していたが、「国民」としての「資格」と「資質」を持っている民族であることをあらわすためのことであるといえ、「国民」としての責任、そしてそこから義務付けられる役割と義務に対する強要を、朝鮮の長久な歴史と繋ぎ合わせて述べており、このような論調は李光洙特有の論調であると述べられる。

このような長久な歴史や古代文化を用いながら論じた李光洙の論調は、安昌浩の「国民皆業主義」における論調とははっきりと異なることが分かる。安昌浩は「大戦中に富強な米・独・英の各国の婦人まで働いた」¹⁸と、西洋の国民の皆業の活動を例として挙げながら、「最後の目的である自主独立を達成する日まで決して奮闘をやめないあのアイルランドをみて、インドをみて、エジプトを、フィリピンをみて、また韓国をみて」¹⁹という、第一次世界大戦の終結における世界の動向に注目しながら独立運動の方向を述べていた。

以上、李光洙は『独立新聞』において朝鮮が日本より長久な歴史、発達した文化の伝播を主導

したこと、約4200年の独立した国民としての記録を持ち、特殊の言語と習慣を持っていたことを挙げながら、祖先の民族性への高い評価を根拠に「国民」への「資格」と「資質」を論じていたが、「2・8独立宣言書」と『韓日関係史料集』の編纂の際に学んだ知識のもとに書かれた内容が多かったのではないと思われる。

しかし、論調においては過去10年間に国民として義務を果たせなかったことについての批判の内容も入っているが、それは「団結」・「統一」ができなかったことの批判だけではなく、今後「団結」・「統一」できる「国民」に改造させることを重点に論じていた。

臨時政府の関係者からの記事によると、実際は国民の「団結」・「統一」はあまりできず、「国民」への改造も思い通りにはいかなかったようである。

安昌浩は、「我が国民が断定に実行する六大事（新年祝賀会席上の演説）」において、「もし召使に不満があって新しい召使が必要ならば、全部追い出ささい。しかしもし使えそうなら、少し不満だとしてもあやしながら使いなさい」²⁰と、多少不満があっても我慢して使うべきだとしながら、「李東輝が倭人と通じることがあったら私と一緒に彼を殺しましょう。しかし、今日は私と一緒に彼の命令に服従しましょう」²¹と、臨時政府の命令に従うことを訴えていた。これは、国民が臨時政府に対して不満を持っており、「団結」ができないことをあらわしている。

「上海には偏党がある、決裂がある、だから滅びたと言われている」²²と、上海の分裂が噂になっている状況についても書かれ、分裂が非常に深刻な問題となり、「団結」と「統一」がどれくらい急務であったのか想像に難くない。

上海臨時政府の樹立から経験した「統合」の難しさ、それに伴う政府に対する国民の非難を直接経験していた李光洙も、分裂の問題について深刻に考え、「団結」と「統一」を掲げて、（無署名）「信頼せよ容恕せよ」（第32号、1919年12月25日）、（無署名）「本国同胞よ（十事で告げる）」（第41号、1920年1月31日）、（無署名）「大韓人よ、大韓の独立は全民族の一心団結と必死的な努力を要求する」（第58号、1920年3月25日）において、臨時政府を信じて政府の指示に従うことを力説していた。

「亡国の民族が興国の民族になろうとするなら改造しなければならない」²³という使命から「新国民の新生活をはっきりと経営できる資格と能力があるように、民族そのものの改造を執行するべきだ」²⁴と述べながら18回にわたって連載された長白山人「宣伝改造」²⁵も、「国民」を改造するために書かれた論説である。具体的には「実」、「信」、「十年生聚十年教訓」、「遠慮」、「団合」に分けて述べられている。

まず「実」では、「改造の中枢であり、出発点として実を決めた」と述べながら、「団結」・

「大事」を成すためには「実」が重要で、民心を統一し激励するにも「実」をもってし、世界列国の世論と動静を喚起するにも「実」をもってし、将来列国に信任される国家と国民になるためにも「実」をもってし、「「実」とは必ず軍事準備だけをいわず、各人が自己の力量に合わせて毎日作為することを指す」という「皆業」の意味も含めて述べている。

「信」では、一度愛国者として許し、独立運動の同志として許した後には、独立の目的が完成し、死ぬまで愛国者として信じて独立運動の同志である者が「信」の人であると説明している。「背信」の例として伊藤博文・李完用・宋秉峻・尹徳栄など、国を裏切った国民・王を裏切った賊臣・民族の独立運動を妨害する走狗・同志を裏切った愛国者を挙げており、「信」と「背信」の基準が朝鮮の興国と亡国の原因と結び付けられて認識されていることが特徴である。

「十年生聚十年教訓」では、「呉王の夫差に会稽の恥辱を受けた越王の句踐が臥薪嘗膽しながら取った政策だ。句踐は10年間軍備を貯蓄し、10年間軍隊を養成して、ついに快く会稽の恥辱を雪辱した」と述べながら、ただ悲憤の涙を流しながら時期が来ることを待っている志士を批判し、現在の責任を過去10年間の先輩志士に負わせている。

「遠慮」では、統一した愛国心を主張し、団結できなかった過去10年を「近慮」とし、「団合」では、先輩志士が絶叫した「団合」を言及しながら、3・1運動の大団合を高く評価し、組織の構成と活用を述べている。

このように、長白山人の「宣伝改造」とは、内側の朝鮮民族と外側の列国を意識しながら過去10年を批判し、「国民」として任務を果たせなかった愛国志士を「国民」に改造させるために書かれた改造論であったといえる²⁶。

李光洙は許英肅に送った手紙にも「私は英肅が同胞に献身する貧しい儒者を愛し、助けてあげる妻になってくれることを願います。4ヵ月内に会えますが、私は精神的に大きく変化し、非常に着実に穏健な者になり、常日ごろ人格の修養に尽力する者となりました」（1920年1月推定）²⁷と、自ら修養によって改造されており、許英肅も自分のように改造されることを望んで、許英肅も「国民」の一人として改造されることへの望みをもっていたことが窺える。「どうしても世の中を住みやすい所に使いたいです。些細な喧嘩や虐殺、嫉視、自慢を捨て、謙遜と愛に満ちている世の中を作りたいです。イエスが死んだのは、明らかにそのためでした」（1920年4月24日）²⁸という手紙からは、改造された自分によって世の中を改造させようとする強い執念も読み取ることができる。「改造」を命がけのこととして認識し、イエスの救いと同じレベルとして考えていたことは、どれほど「国民の改造」が難しいか李光洙もよく知っていたことを表していることだといえる。結局「私はいくら全力を尽くしても、私の人格と生活を根底から改造し、英肅が信じ、

同胞が信じ、天が信じる人に絶対になる」(1920年6月19日)²⁹と、信用できる自分に改造することを誓うことにまで至っている。

しかし、「団結」と「統一」ができない状況、「国民の改造」ができないことからくる絶望感と、そこから同志や民族に感じる孤独と寂しさ、さらに、許英肅と離れていたことも絡み合っ、李光洙の上海での生活は懐疑を抱くこととなった。「ああ、世の中にはどれくらい冷たさに泣いている男女が多いでしょうか。今この瞬間あなたもその一人、私もその一人！」³⁰と、現実の無情と冷情を感じながら、自分もそれで苦しんでいると嘆いている。

「私は全く一人です」(1919年2月12日)³¹、「世の中の人情はとても冷たいです」(1920年3月14日)³²と述べながら、「私が彼らのためにどれほど苦勞したでしょうか。過重な仕事でこのように病気になりました。国のためにしたことなら、なおさら彼らは私を慰めてくれるべきです。元来何の報酬を目的にしてしたことではないですが」(1920年3月14日)³³と、友人と同志から感じた冷やかさ・無情に心を痛めていたことを打ち明けている。「私は今健康を損ない、孤独に泣いています。しかし、どこにも暖かい慰勞の手はありません」(1920年3月14日)³⁴という肉体的な苦痛と精神的な寂しさは「外国人はどうなのか。少なくとも朝鮮人はそうです」(1920年3月14日)³⁵と、明らかに朝鮮民族に対する不満へ移り、「団結」しない民族、改造しない「国民」に対する失望と絶望から懐疑に変わっていくことが読み取れる。

「昨年9月から非常に自暴自棄の生活をしています」(1920年5月6日)³⁶という李光洙の告白は、李光洙が早い時期から上海での生活を諦めていたことを読み取ることができる。それにより、許英肅からの「放蕩」(1920年5月7日)³⁷な生活によって「花柳病」(1920年5月22日)³⁸にかかったと許英肅から非難され、また「民族運動を掲げて上海で放浪な生活をするよりは、むしろ本国に戻り、監獄に入るほうがいい」(1920年5月6日)³⁹と叱責されたことは、李光洙にとって大きな衝撃であった。「あくまでも私を信じて愛するあなたの方からこのような誤解と侮辱をうけることはとても残念です」(1920年5月22日)⁴⁰という悲惨な気持ちは、英肅との関係だけではなく、上海での生活で感じた思う通りにいかない独立運動と、そこから生じる絶望と孤独と寂しさ、そして無情から感じる失望感も絡み合っているといえる。

「英肅よ、それははっきりと罪です。愛していると言いながら第三者の中傷の話を信じて相手の心を類推することは実に罪です」(1920年5月22日)⁴¹と、互いに信じ合えないことに深く傷つけられたことは、李光洙が繰り返して述べていた「信」においてすら「不信」「背信」が蔓延していることをあらわしているように読み取ることができる。

さらに、「私は今後約一週間は静養しようとしています。体がかなり疲れています。過度な過役、

思慮、孤独、營養不足、気候不順が全て合わさってこの結果になりました」(1920年4月24日)⁴²という過重な仕事と精神的な孤独による苦痛の訴え、「過去一年間の苦闘のため上海にいる多数の重要人物が全員健康を損なったようです。悲痛なことです」(1920年6月20日)⁴³という李光洙一人だけの問題ではない上海臨時政府の状況は、上海でどのような生活をしていたのか想像に難くない。

結局、「私はこの著述と、その他三種の著述を終えたら、他の職業を探して、静かに文学や思想を研究しながら安定した生活がしたい」⁴⁴と打ち明けることとなり、依頼された著述はしているが、もうその仕事が終わったらやめたいという気持ちを持っていたことが分かる。「上海に来て英語を1年くらい勉強してから、米国⁴⁵に行って二人で過ごそう」(1920年1月推定)⁴⁶という提案をしたり、「私は只今ある新聞に求職広告を出します」(1920年11月9日)⁴⁷と決心したことは、李光洙が上海での生活を整理し、許英肅と平凡な生活を求めて第三国である米国を考えており、安定した生活を求めていることが窺える。

すなわち、李光洙は公的な立場では「国民」の「改造」や、「団結」・「統一」を訴え、独立運動家としての面貌をみせていたが、私的な立場では健康を損なうくらいの過度な任務と、精神的な孤独と失望感などが重なって耐えられず、苦しんでいたといえる。李光洙は許英肅との愛情の問題があっても『独立新聞』の主筆と、独立運動家という立場を忘れず、「国の独立問題」を優先し、「国民」の「団結」・「統一」と「改造」についても自らを改造しながら力説していた。その際に許英肅も一人の「国民」として改造の対象になっていた。

しかし、過重な仕事、何のやりがいも感じられない孤独な生活への不満が重なって、その不満が個人の次元を超え、同志、民族レベルにまであがり、上海での生活を考え直す原因となっていたといえる。

3.2. 『独立新聞』における李光洙の任務

『独立新聞』は、1919年8月21日の創刊号から、1926年11月30日⁴⁸に至るまで、全198号が刊行された。『独立新聞』は、「独立」を目的として、上海と朝鮮内、海外の朝鮮人を読者層とした国漢文版新聞であり、大韓民国臨時政府とは別に独立した独立新聞社を組織していたが、当時から臨時政府の機関紙に準ずる新聞として認識されており⁴⁹、独立運動の宣伝機関紙として発刊された。上海では1919年3月28日から『独立新聞』の前身ともいえる『独立新報』がすでに発行されており、4月13日に大韓民国臨時政府の樹立が公布されたが、9月11日に大韓国民議会(ウラジオストク)と、大韓民国臨時政府(上海)、漢城政府(朝鮮)を統合した大韓民国臨時

政府の樹立が公式に公布される前から『独立新聞』が発行されていたことは、当時新聞という媒体が独立運動においてどれ程急務で、重要であったかを示している。

李ハヌルは⁵⁰『独立新聞』を安昌浩勢力の言論紙として分析し、安昌浩の人脈との関わりの変化による『独立新聞』の論調の変化を論じていた。安昌浩が統合政府が立てられる以前から主導者として活動し、広い人脈と能力を動員して『独立新聞』に財政的な支援をしたことは事実であり、『独立新聞』発行を主導したといえるが、年号を「大韓民国元年」「大韓民国二年」と表記し、臨時政府の法令・人事・布告文・國務會議と臨時議政院の記事、國務院布告などを載せたことから、『独立新聞』は臨時政府の事実上の機関紙として役割を果たしていたといえる。

さらに、独立新聞社の住所が何度も変わったり、内容によっては人名や地名を伏せ字にしたり、「具体的な計画は秘密を要する」⁵¹と併記しながら書いた記事などから、『独立新聞』がどのような任務を遂行し、朝鮮人からはもちろん、日本人にも鋭意注視されていたことが窺える。

本章では、1920年7月1日に出版を予定していた未刊の李光洙著『獨立新聞論説集』⁵²に収録予定だった論説を中心に、李光洙が『独立新聞』で何を述べていたのかを調べ、それがどのような論調として述べられていたのか、李光洙の上海時代における独立運動の活動と思想について考えることにする。

李延馥は⁵³、『独立新聞』の社説の内容はすべて独立運動に関係するものだが、内容によって任意に8つに分類した。その結果、独立運動（方法）関係の内容が全体の164個の社説の中51個で、31%を占め、最も多くの比重を占めていたことが明らかになった。この結果は、『独立新聞』において何を目的として重点的に書かれたのかをよくあらわしている結果であるといえる。

当時、独立運動の方法は大きく3つに分けて述べられていた⁵⁴。それらは、独立運動の唯一の方法は血戦だけだとする主戦論⁵⁵と、海外への宣伝を通じて世界の与論と同情に訴えるべきだとする宣伝論（あるいは外交論）⁵⁶、青年の教育・民族の改造・産業の奨励を独立運動の主旨とする実力養成論⁵⁷である。しかし、これらの方法論について『独立新聞』において「独立という趣旨と目的に関する意見の差異ではなく、専らその方法における異なる意見の差異として、このような意見の差異は決して互いに排除することでもなく、攻撃することでもない」⁵⁸と述べられたことは、方法論は異なっても独立という目的においては同じであることの強調であり、そこから「団結」と「統一」の主張を読み取ることができる。

また『独立新聞』において「独立の方法において様々な方法論があることは、むしろ各方法論を十分に活用することによって社会や国家において利益になる」⁵⁹ことであり、「独立という趣旨を同じくする同志である以上団結するべきだ」⁶⁰と力説されたことは、独立運動の方法による

分裂を、「独立」という目的を立てることで「団結」と「統一」を呼びかけていたといえる。

さらに、第一次世界大戦の終結と、3・1運動後という大きな成果、そして、上海臨時政府の樹立という状況の変化は、血戦の時期が切迫したという雰囲気が高まることで、具体的な血戦の準備論が主流となった。

『独立新聞』（第90号）1921年1月15日付の（無署名）「國務院布告」第三号では、「我が独立運動の根本方針は専ら血戦にあり、過去1年以上力を尽くした全てのことは、実にこれを準備するためである」と述べられ、（無署名）「戦争の年」⁶¹では「まだ公式的に発表したことはないが、我が臨時政府が今年中に独立戦争を宣言することは既に決められたことで、確定された事実のようである」と、臨時政府の血戦の方針が代弁された。

他に、『独立新聞』の論説（無署名）「独立完成の時機」（第24号、1919年11月1日）、（無署名）「絶対独立」（第31号、1919年12月2日）、（無署名）「戦争の年」（第38号、1920年1月17日）、（無署名）「戦争の時機」（第15号、1919年9月30日）、（無署名）「外交と軍事」（第17号、1919年10月4日）、（無署名）「婦人と独立運動」（第47号、1920年2月17日）、（無署名）「再び国民皆兵に対して」（第57号、1920年3月23日）、（無署名）「美日戦争」（第56号、1920年3月20日）、ソンアジ「赤手空拳（独立運動進行方針私見）」（第82号、1920年6月5日～第86号、1920年6月24日）においても、具体的に血戦を通じた独立と、それに必要な準備論について書かれていた。

李光洙も上記の論調と同様に、『独立新聞』（第41号）1920年1月31日付の論説（無署名）「本国同胞よ（十事で告げる）」において、「大概今後の独立運動は専ら血戦だけであろう」⁶²と述べており、血戦が独立の唯一の方法だと主張し、その血戦も（無署名）「世界的な使命を受けた我族の前途は光明だ」⁶³においては「日本に熱血の洗礼をあげる者は実に我が大韓民族で、そのため血戦はただ我々の当然であり、神聖な独立の完成だけではなく、実に日本のため、世界のための神聖な天からの明命だ」と、血戦を天からの使命のように意味づけている。

『独立新聞』（第43号）1920年2月5日付の（無署名）「國務院布告」第一号では、上海臨時政府が掲げている独立運動の方法論がよくあらわれている。「血と涙として願う。愛している我が二千万露・中両同胞よ、我々が直面している時機と国土を見回して、あらゆる私見と私情を全部捨て、一つになるのだ。しかし、大韓民国の政府を中心に一つになるべきだ」⁶⁴と、上海臨時政府を中心に団結するべきであると述べ、「ああ！神聖な壇祖と勇敢な祖先の血を受けた大韓国よ、将来どのようにするつもりなのか。奴隷の生を選ぶのか、自由の死を選ぶのか」⁶⁵と、優秀な祖先を持つ民族として今日の状況を嘆き、日本からの独立を「奴隷」から「自由の国民」になるも

のとして認識していることを読み取ることができる。

しかし、「自由の国民」になることは死までを覚悟しなければならない絶命の意味を持つものとして、命をかけた「血戦」と結びつく。ここで「独立」とは、上海臨時政府を中心に団結し、血戦を通じて「自由の国民」の地位を獲得することである。

この方法論を実現するためには、まず国民一人一人の自覚と改造が必要であるため、国民の役割と義務について論じられるようになった。国務総理事李東輝は「この方針の実現の可否は政府の能力次第によるというより、国民の為不為に従うことで、（中略）我が二千万大韓男女は一心同体になってこの大方針を必ず実行する義務を自覚するべきだ」⁶⁶と、国民としての役割と義務を強調していた。その際に国民としての国家のための基本的な義務として「皆兵」「皆納」「皆業」が述べられ、『独立新聞』において「皆兵」「皆納」「皆業」について繰り返して詳しく論じられていたことは⁶⁷、まず「団結」と「統一」できる「国民」に改造させるための要件であったからであると述べられる。

「国民」の役割と義務に対する認識は早い時機から認識されていた。日露戦争の終結と、その結果として採決された乙巳条約のため、大韓帝国が保護国として転落した際、1905年4月5日サンフランシスコの親睦会を拡張して設立した「共立協会」⁶⁸の機関紙『共立新報』の1908年12月9日付の「論説：国民論」では、「真の国民になるためには、全百姓が国家の仕事に命を捧げてから国家の独立と国家の自由を回復し、百姓が国家の主人になって憲法を決め、大義体を実行した後によく真の国民になるはずで、今日我々が目的とすることは国民主義であり、我々が強要することは国民主義であるから、美しい国民主義よ」⁶⁹と「国民主義」について述べられていた。「国家の独立」と「国家の自由」のために命を捧げてから国民としての資格が得られるということは、今までとは異なる「国民」としての義務が強要されていたことをあらわす。義務を果たす前の「百姓」と、国民としての義務を果たした後の「国民」を区別して言及していたことは、まだ「百姓」のままの朝鮮民族と、「国民」になっているアメリカの国民は区別され、西洋から学んだ「国民主義」によって「百姓」の朝鮮民族をアメリカのような「国民」に改造させようとする目的となったといえる。

しかし、「国民」の役割と義務が強要されればされるほど、現在の状況に置かれている責任を「百姓」に負わせることになる。たとえば、安昌浩は独立の準備として演説した（無署名）「我が国民が断定に実行する六大事（一）（新年祝賀会席上の演説）」において、「大韓の国に過去には皇帝が一人しかいなかったが、今日には二千万国民が皆皇帝で、諸君も皆皇帝で（中略）皇帝とは何なのか。主権者のことだが、過去に主権者は唯一であったが、今は諸君が皆主権者である。

過去主権者が一人だった時は国家の興亡は一人にあったが、今日は人民全体にあるのだ⁷⁰と、国民一人一人に国家の存亡の責任があることを明示している。

李光洙も（無署名）「愛国者よ」（第14号、1919年9月27日）、（無署名）「君子と小人」（第30号、1919年11月27日）、（無署名）「七可殺」（第43号、1920年2月5日）、（無署名）「国民皆兵（大韓人よ軍籍に入れ）」（第46号、1920年2月14日）、（無署名）「新生」（第48号、1920年2月26日）、（無署名）「三一節」（第49号、1920年3月1日）、（無署名）「三氣論」（第53号、1920年3月13日）、（無署名）「最後の定罪、李垠娶仇女」（第74号、1920年5月8日）において国家の亡国の原因を国民に負わせていた。

（無署名）「愛国者よ」⁷¹では、李光洙は「汝が愛国者なら私の話を聞け」と始め、韓国を滅びさせたのは光武皇帝と、李完用、宋秉畷の権謀術数のためだとし、権謀術数を捨てること、猜疑と曲解を捨てることを主張する。最後は「諸君は頭脳に昔からの悪習をまだ除去できず、我が民族の立場を分明に自覚する鋭さがない。ああ愛国者よ！」と締めくくっている。

（無署名）「七可殺」⁷²では、具体的に我々の敵と賊⁷³について述べられているが、対象の7つのうち日本人が対象となったのは総督政務總監の1つだけで、賊として述べられていた6つの対象は朝鮮人である。これは、亡国になった原因を日本より朝鮮の方に置き、その自覚から国家の存亡の責任論につなげて、「国民」としての役割と義務を強要していたといえる。

李光洙が（無署名）「本国同胞よ（十事で告げる）」（第41号、1920年1月31日）、（無署名）「国民皆兵（大韓人よ軍籍に入れ）」（第46号、1920年2月14日）、（無署名）「大韓人よ、大韓の独立は全民族の一心団結と必死的な努力を要求する」（第58号、1920年3月25日）、（無署名）「独立戦争の時機（これに必要な準備）」（第60号、1920年4月1日）、天才「国民皆業」（第101号、1921年4月2日）などにおいて、繰り返して「皆兵」「皆納」「皆業」を用いながら国民としての義務を呼びかけていたことは、まさに責任論によって、国民の役割と義務を果たすことができる「国民」に改造させるためのことであったと思われる。

以上、李光洙は『独立新聞』に上海臨時政府が掲げている独立運動の方法論を積極的に述べていたが、それは『独立新聞』の主筆という公的な立場としての任務ともいえ、『独立新聞』の「創刊辞」に書かれている「民族思想の鼓吹と民心の統一」、「新思想を紹介すること」、「改造或いは復活した新国民を作ること」の使命を果たすための遂行であったともいえる。

4. おわりに

突然の上海での亡命生活、別れたままになっている許英肅との愛情問題は李光洙にとっては不本意なことであった。しかし、『独立新聞』の主筆として、新聞のメディアを通じて、朝鮮の独立を宣言し、民族を「団結」・「統一」させ、血戦を準備させるために「国民」としての役割と義務の実行による改造を力説したことは、上海における李光洙の過重だが、重要な任務であったといえる。

朝鮮民族の長久な歴史、文化民族としての業績を用いながら国民性の「資格」と「資質」を述べたことは、臨時史料編纂会主任を引き受けて『韓日関係史料集』を編纂した経験も影響を及ぼし、朝鮮民族に改造できる可能性をみせるためのこととして、李光洙特有の論調でもあったといえる。

しかし、上海臨時政府の分裂、過重な任務、そして、許英肅との愛情問題との絡み合いによって、李光洙の上海での生活には早い時期から苦勞と懷疑が生じた。繰り返して述べていた「団結」・「統一」・「国民の資格と資質」・「改造」は独立運動のためだけではなく、朝鮮の独立はもちろん、その独立を維持し、世の中で共生するための最小限の準備であった。しかし、独立運動は思う通りにはならず、そこから上海で感じていた孤独と寂しさ、誤解と中傷などの経験は李光洙にとっては耐えがたい悲劇であったと思われる。

以上の上海での経験と悟ったことは李光洙の今後の独立運動の方法について考え直すにあたって重要な要素になったと思われ、李光洙が上海を離れた時期は、特に上海にて最も分裂が極めた時期として、このような状況の中で李光洙が選択できる道が帰国以外になかったのではないと思われる。

注

1. 当時李光洙は恋愛中だった許英肅と北京に愛情逃避中だった。李光洙と許英肅が考えていた北京への逃避がどのように実行されたのかについては、『春園愛情書翰実録集—愛する英肅へ』（文宣社、1955）の「東京にて」第14信に書かれている。しかし、この手紙が『李光洙全集』18（三中堂、1962）には収録されていない点は興味深いこととして、この内容については、拙稿「李光洙の書翰集『春園愛情書翰実録集—愛する英肅へ』について」『近代書誌』11、ソミョン出版、2015（「이광수의 서한집『春園愛情書翰实録集—사랑하는 英肅에게』에 대하여」『近代書誌』11, 소

- 명출판, 2015) を参照されたい。
2. 李光洙『私の告白』春秋社, 1948, 『李光洙全集』13三中堂, 1962, 収録p.230. 以下、李光洙の作品については、主に初出の雑誌や新聞から引用し、三中堂の全集から引用する場合はその点を記す。
 3. 『大韓人正教報』は、大韓人国民會のシベリア地方總會の機関誌として、安昌浩を中心とする米国の国民會の總會から派遣された李剛の責任のもとで発行された朝鮮語雑誌である。崔起榮『植民地期民族知性と文化運動』ハヌルアカデミー, 2003, pp.157-161.
 4. 李ハヌル「上海版『独立新聞』の発刊主体と性格」成均館大学史學科修士学位論文, 2008, p.8.
 5. 『独立新聞』103号, 1921年4月21日付には「李光洙君は数月前に辞任したので読者諸彦は照亮することを望む」という社告が書かれている。
 6. 李光洙の書翰集については、拙稿「李光洙の書翰集『春園愛情書翰實録集—愛する英肅へ』について」『近代書誌』11, ソミョン出版, 2015(「이광수의 서한집『春園愛情書翰實録集—사랑하는 英肅에게』에 대하여」『近代書誌』11, 소명출판, 2015) を参照されたい。
 7. 『独立新聞』は創刊号から1919年10月16日(21号)までは『独立』と称したが、1919年10月25日(22号)から『独立新聞』に変わった。『独立新聞』のテキストは、復刻版『上海独立新聞』(韓国学資料院, 2009)を用いたが、金源模編訳『春園の光復論：独立新聞』(壇国大学出版部, 2009)と、金源模『ヨンマルの雲—春園李光洙の親日と民族保存論』(壇国大学出版部, 2009)も併せて参照した。
 8. 『独立新聞』83号, 1920年6月10日付には出版予定だった李光洙著『独立新聞論説集』の広告が載っている。その広告には『独立新聞論説集』に収録予定だった論説のタイトルが列挙されている。論説集は内容によって4篇に分けられる予定であった。第一篇「建国の心誠」には(一)「建国の心誠」、(二)「三氣論」、(三)「自由の価」、(四)「統一」、(五)「国民皆兵」、(六)「愛国者よ」、(七)「君子と小人」、(八)「信頼せよ、容恕せよ」、(九)「新生」、(十)「世界的な使命を受けた我族の前途は光明だ」、第二篇「独立完成の時機」には、(一)「独立完成の時機」、(二)「独立戦争の時機」、(三)「臨時政府と国民」、(四)「独立戦争と財政」、(五)「十事で告げる」、(六)「七可殺」、(七)「韓族の独立国民になる資格」、(八)「美日戦争」、(九)「独立軍の勝捷」、(十)「大韓人よ」、(十一)「韓中提携の要」、(十二)「六大事」、第三篇「韓国と日本」には、(一)「韓日両族の合することできない理由」、(二)「日本国民に告げる」、(三)「日本人へ」、(四)「日本の五偶像」、(五)「同胞よ敵の虚言に騙されるな」、(六)「日本の現勢」、第四篇「雜纂」には(一)「独立運動の文化的価値」、(二)「国恥第九回を哭する」、(三)「三一節」、(四)「大韓の姉よ、妹よ」、(五)「安泰国先生を哭する」、(六)「政治的罷工」、(七)「最後の定罪」が挙げられている。『独立新聞』は『独立新聞』86号, 1920年6月24日を発行してから6ヶ月間発行停止されたため、その影響で『独立新聞論説集』の出版が中止されたと考えられる。
 9. 李光洙『私の告白』春秋社, 1948, 『李光洙全集』13三中堂, 1962, p.233.
 10. 前掲書, p.233.

11. 金願模『ヨンマルの雲－春園李光洙の親日と民族保存論』壇国大学出版部, 2009, p.86.
12. 『独立新聞』創刊号, 1919.8.21.
13. 『独立新聞』15号, 1919.9.29.
14. 李光洙「愛する英肅へ」『李光洙全集』18三中堂, 1963(李光洙「사랑하는 英肅에게」『李光洙全集』18三中堂, 1963)p.466.李光洙『春園愛情書簡実録集－愛する英肅へ』文宣社, 1955(李光洙『春園愛情書簡実録集－사랑하는 英肅へ』文宣社, 1955)に未収録の書翰は「愛する英肅へ」『李光洙全集』18三中堂, 1963より引用する。
15. 李光洙「愛する英肅へ」『李光洙全集』18三中堂, 1963(前掲), pp.466－467.
16. (無署名)「国民皆兵(大韓人よ、軍籍に入れ)」『独立新聞』46号, 1920.2.14.執筆者は不明であるが、出版予定だった李光洙著『独立新聞論説集』の収録予定論説のタイトルに入っているため、李光洙が書いたものと受け入れる。
17. 前掲書。
18. (無署名)「我が国民が断定に実行する六大事(二)(新年祝賀席上の演説)」『独立新聞』36号, 1920.1.10. 執筆者が不明であるが、安昌浩の新年祝賀席上の演説をまとめたものである。『独立新聞』の論調としても受け入れる。
19. (無署名)「世界大戦が来るだろう」『独立新聞』57号, 1920.3.23.執筆者が不明であるが、安昌浩の演説をまとめたものである。『独立新聞』の論調としても受け入れる。
20. (無署名)「我が国民が断定に実行する六大事(一)(新年祝賀席上の演説)」『独立新聞』35号 1920.1.8.執筆者が不明であるが、安昌浩の新年祝賀席上の演説をまとめたものである。『独立新聞』の論調としても受け入れる。
21. (無署名)「我が国民が断定に実行する六大事(二)(新年祝賀席上の演説)」『独立新聞』36号, 1920.1.10.執筆者が不明であるが、安昌浩の新年祝賀席上の演説をまとめたものである。『独立新聞』の論調としても受け入れる。
22. (無署名)「勿彷徨(安昌浩氏演説)」『独立新聞』33号, 1919.12.27.執筆者が不明であるが、安昌浩の演説をまとめたものである。『独立新聞』の論調としても受け入れる。
23. 長白山人「宣伝改造」『独立新聞』創刊号, 1919.8.21.
24. 前掲書。
25. 長白山人「宣伝改造」『独立新聞』創刊号, 1919.8.21～23号, 1919.10.28.「長白山人」は、安昌浩が李光洙につけた雅号である。「雅号の由来(二)」『三千里』1930, 5月号(「雅号의 由来(二)」『三千里』1930, 5月号), p.76.
26. 同じ「改造論」でも「民族改造論」(『開闢』23号, 1920.5.)の「弁言」で示されているように、読者が「この文を朝鮮民族の将来がどうなるか、どうすればこの民族を現在の衰頹から救い、幸福と繁栄の将来へ引導するかを考える兄弟と姉妹」であること、批判の対象が500年間の朝鮮の

祖先であること、改造の期間が長年かけての「民族改造論」であることは、根本的に「宣伝改造」と異なる点であるといえる。

27. 李光洙『春園愛情書簡実録集－愛する英肅へ』文宣社文宣社, 1955(前掲), pp.87－88.
28. 前掲書, pp.87－88.
29. 前掲書, p.57.
30. 前掲書, p.57.
31. 李光洙「愛する英肅へ」『李光洙全集』18三中堂, 1963(前掲), pp.466－467.
32. 李光洙『春園愛情書簡実録集－愛する英肅へ』文宣社, 1955(前掲), p.64.
33. この内容は李光洙「愛する英肅へ」『李光洙全集』18では「……」と伏せ字になっている。李光洙「愛する英肅へ」『李光洙全集』18三中堂, 1963(前掲), p.471. 李光洙『春園愛情書簡実録集－愛する英肅へ』文宣社, 1955(前掲), p.65.
34. 李光洙『春園愛情書簡実録集－愛する英肅へ』文宣社, 1955(前掲), p.65.
35. 前掲書, p.65.
36. 前掲書, p.52.
37. この内容も李光洙「愛する英肅へ」『李光洙全集』では「○○」と伏せ字になっている。李光洙「愛する英肅へ」『李光洙全集』18三中堂, 1963(前掲), p.479. 李光洙『春園愛情書簡実録集－愛する英肅へ』文宣社, 1955(前掲), p.74.
38. この内容も李光洙「愛する英肅へ」『李光洙全集』では「○○病」と伏せ字になっている。李光洙「愛する英肅へ」『李光洙全集』18三中堂, 1963(前掲), p.481. 李光洙『春園愛情書簡実録集－愛する英肅へ』文宣社, 1955(前掲), p.78.
39. 李光洙『春園愛情書簡実録集－愛する英肅へ』文宣社, 1955(前掲), pp.72－73.
40. 前掲書, p.79.
41. 前掲書, p.79.
42. 李光洙『春園愛情書簡実録集－愛する英肅へ』文宣社, 1955(前掲), p.55.
43. 前掲書, p.59.
44. 李光洙「愛する英肅へ」『李光洙全集』18三中堂, 1963(前掲), p.467.
45. この内容は「愛する英肅へ」『李光洙全集』18では「米国」の部分が「○○」と伏せ字になっている。しかし、二人だけの手紙に伏せ字を使ったはずがなく、編集の際に「米国」を伏せ字に処理したと考えられる。これは意図的な削除処理として、「米国」を読者に明かしたくないことであったことが窺える。つまり、「米国」への移住が独立運動とは関係ない個人的な希望によるものとして、李光洙が独立運動家として評価されていたことに対する影響の大きさを考慮した上で

の処理であると考えられる。李光洙 『春園愛情書簡実録集－愛する英肅へ』 文宣社, 1955(前掲), p.87. 「愛する英肅へ」『李光洙全集』18においてはp.469.

46. 李光洙 『春園愛情書簡実録集－愛する英肅へ』 文宣社, 1955(前掲), p.87.
47. 李光洙 「愛する英肅へ」『李光洙全集』18三中堂, 1963(前掲), p.488.
48. 『独立新聞』は創刊号から21号, 1919年10月16日までは『独立』と称したが、22号, 1919年10月25日から『独立新聞』に改題された。
49. 『独立新聞』が上海臨時政府の機関紙であるかどうかの疑問はあるが、『独立』創刊号で黙堂が書いた「本報創刊感言」に「もし政府の機関なら政府は即ち、韓族の独立を撤出する機関ではないのか。そうならその機関の文芸部が刊行する言論機関だと分かれば無関であり」と『独立新聞』が独立運動の責任を負っている臨時政府の機関紙として認知されることを認めており、臨時政府の機関紙としての任務に忠実であったと判断できる。独立新聞社は臨時政府の附属機関ではなかったが、臨時政府の財務部が『独立新聞』の創刊費用の大部分を支払い、資金不足を臨時政府の臨時補助金で解決したことから、機関紙として発行されていたと考えられる。李ハヌル 「上海版『独立新聞』の発刊主体と性格」成均館大学史學科修士学位論文, 2008(前掲) 参照。「臨時政府の法令」、「國務會議」と「臨時議政院の記事」、「國務院布告」などを載せていたことから臨時政府の機関紙としての任務を果たしていたと考えられる。
50. 李ハヌル 「上海版『独立新聞』の発刊主体と性格」成均館大学史學科修士学位論文, 2008(前掲)
51. (無署名) 「六大事に関する安昌浩氏の談」『独立新聞』37号, 1920.1.13. 執筆者が不明であるため、『独立新聞』の論調として受け入れる。
52. 本稿では、引用文においては分ち書き以外はなるべく原文のままに記した。
53. 李延馥 「大韓民国臨時政府と社会文化運動—独立新聞社説分析—」『史学研究』37号, 1983 (李延馥 「大韓民国臨時政府와 社会文化運動—独立新聞의 社説分析—」『史学研究』37号, 1983) p205. ここで分類された項目は次の通りである。1.創刊辞・続刊辞など……5(3.05%) 2. 日帝・総督府、日本人関係……14(8.5%) 3.臨時政府・議政院関係……22(13.4%) 4. 国民代表会関係……13(7.9%) 5.独立運動(方法)関係……51(31%) 6.国民・海外同胞関係……36(21.9%) 7.記念日及び各種追念関係……20(12.2%) 8.其他……3(1.8%)。
54. (無署名) 「絶対独立」『独立新聞』31号, 1919.12.2.執筆者が不明であるため、『独立新聞』の論調として受け入れる。
55. 代表的なものとして李東輝を挙げることができる。
56. 代表的なものとして李承晩を挙げることができる。
57. 代表的なものとして安昌浩を挙げることができる。
58. (無署名) 「絶対独立」『独立新聞』31号, 1919.12.2.執筆者が不明であるため、『独立新聞』の論調として受け入れる。

59. 前掲書。
60. 前掲書。
61. (無署名)「戦争の年」『独立新聞』38号, 1920.1.17.執筆者が不明であるため、『独立新聞』の論調として受け入れる。
62. (無署名)「本国同胞よ(十事で告げる)」『独立新聞』41号, 1920.1.31.執筆者は不明であるが、出版予定だった李光洙著『独立新聞論説集』の収録予定論説のタイトルに入っているため、李光洙が書いたものと受け入れる。
63. (無署名)「世界的な使命を受けた我族の前途は光明だ」『独立新聞』45号, 1920.2.12.執筆者は不明であるが、出版予定だった李光洙著『独立新聞論説集』の収録予定論説のタイトルに入っているため、李光洙が書いたものと受け入れる。
64. (無署名)「國務院布告」第一号『独立新聞』43号, 1920.2.5.
65. 前掲書。
66. (無署名)「李総理の施政方針演説」『独立新聞』51号, 1920.3.6. 3月2日議政院で行った李東輝の施政方針演説を整理し、批判の見解も入れて書いたものとして、執筆者が不明であるため、『独立新聞』の論調として受け入れる。
67. 「皆兵」「皆納」「皆業」に関する論説は、(無署名)「独立戦争と財政(国民皆納主義の実行(安昌浩))」『独立新聞』44号, 1920.2.7.(無署名)「国民皆兵(大韓人よ、軍籍に入れ)」『独立新聞』46号, 1920.2.14.(無署名)「再び国民皆兵に対して」『独立新聞』57号, 1920.3.23.ソニアジ「赤手空拳(独立運動進行方針私見)」『独立新聞』101号, 1920.6.5~86号, 1920.6.24.天才「国民皆業」『独立新聞』101号, 1921.4.2.などがある。
68. 共立協会の会長は安昌浩であった。
69. 「論説：国民論」『共立新聞』1908.12.9.白東玄「大韓帝国期民族認識と国家構想」高麗大学 大学院韓国史学科博士学位論文, 2004.(백동현「大韓帝国期民族認識과 国家構想」고려대학 교대학원 한국사학과 박사학위논문, 2004.), p.202より再引用。
70. (無署名)「我が国民が断定に実行する六大事(一)(新年祝賀席上の演説)安昌浩」『独立新聞』35号, 1920.1.8.執筆者が不明であるが、安昌浩の新年祝賀席上の演説をまとめたものである。『独立新聞』の論調としても受け入れる。
71. (無署名)「愛国者よ」『独立新聞』14号, 1919.9.27.執筆者は不明であるが、出版予定だった李光洙著『独立新聞論説集』の収録予定論説のタイトルに入っているため、李光洙が書いたものと受け入れる。
72. (無署名)「七可殺」『独立新聞』43号, 1920.2.5.執筆者は不明であるが、出版予定だった李光洙著『独立新聞論説集』の収録予定論説のタイトルに入っているため、李光洙が書いたものと受け入れる。

73. 『独立新聞』では、「敵」という日本人に対する呼称に対し、日本に協力している朝鮮人や朝鮮の独立運動に協力しない朝鮮人を「売国賊」「賊」として区別していた。これは民族に対する自覚によって植民地朝鮮、独立戦争を起こさないことに対して日本人なり、朝鮮人なりの責任があるということを明らかに分けて認識していたことを意味していると考えられる。「敵」と「賊」は、韓国語では2つとも「적 (チョック)」という同音異義語である。

参考文献

基本資料

- 『李光洙全集』(全20) 三中堂, 1962.
『毎日申報』・『独立新聞』・『学之光』・『少年』・『開闢』
- 李光洙『朝鮮の現在と将来』, 興文堂書店, 1923.
- 金鵬九「新文学初期の啓蒙思想と近代的自我」『韓国人と文学思想』一潮閣, 1964.
- 宋敏鎬『日帝末暗黒期文学研究』セムン社, 1989.
- 金允植『李光洙とその時代』ソル出版社, 1999.
- 金ウンア「李光洙の親日と変節に関する研究」誠信女大教育大学院 修士学位論文, 2000.
- 金亨国「1920年代初の民族改造論の検討」『韓国の近現代史研究』冬号, 第19集, 2001.
- 宋キソプ「民族改造と自己同一性論理-「無明」論」『語文研究』39, 2002.
- 朴ウンギョン「春園李光洙の「民族改造論」と1920年代植民地朝鮮」西江大大学院修士学位論文, 2003.
- 崔起榮『植民地期民族知性と文化運動』ハヌルアカデミー, 2003.
- 金ジェグァン「1910年代韓国近代小説研究: 李光を中心」檀国大大学院博士学位論文, 2004.
- 金東明「日本帝国支配下李光洙の民族アイデンティティ性」ソウル大大学院修士学位論文, 2007.
- 李ハヌル「上海版『独立新聞』の発刊主体と性格」成均館大学史學科修士学位論文, 2008.
- 波多野節子『『無情』を読む』ソミョン出版, 2008.
- 金源模編訳『春園の光復論: 独立新聞』壇国大学出版部, 2009.
- 金願模『ヨンマルの雲-春園李光洙の親日と民族保存論』壇国大学出版部, 2009.
- 崔珠澗「李光洙の民族改造論の再考」『人文論叢』70, ソウル大学人文学研究院, 2013.